サンスクリット語文法ノート (2)

maghávan-「寛大な」の男性単数主格形について

松浦　高志

1　はじめに

『マハーバーラタ』中には，maghávan-「寛大な」の男性単数主格形 maghavā の異形 (variant) である maghavān が存在する.『リグ・ヴェーダ』中にも同様に異形が存在し, さらにほかの言語との比較によっても異形の存在が想定されるので, 起源は古い可能性がある．これに関連して n 語幹名詞の曲用と音韻法則についても述べる.

2　異形の存在

『マハーバーラタ』中には，maghávan-「寛大な」の男性単数主格形 maghavā (MBh III.51.14 [= Nala 2.14]) の異形である maghavān (MBh III.52.3 [= Nala 3.3]) が存在する．『リグ・ヴェーダ』中にも同様に maghávān という異形が存在する[1].

3　maghavant- による補充

たとえば maghavan- の単数具格形は，maghonā ではなく，maghavant- 語幹による maghavatā になることがある[2]．すなわち maghavan- の変化形の

[1] Lanman, ‘Statistical’, 529.

[2] 辻『文法』p. 47 注*.

うちのいくつかは maghavant- の変化形で補充される場合がある（suppletion，補充法）．これは，もともとこれら二つの語幹が存在していてこれらが統合された，というより，むしろはじめは maghavan- 語幹のみが存在し，二次的に maghavant- 語幹が作られたと考えた方がよいと考えられる．すなわち maghavan- の男性単数主格形である maghavā のほかに（あたかも maghavant- の単数主格形であるかのような）異形 maghavān が存在することが出発点となり[3]，また接辞 -van- と -vant- が意味上類似していて，はじめの音が同じであることが原因となって二次的に maghavant- が作られたと考えられる[4].『リグ・ヴェーダ』中で同様のことが sahā́van- / sáhāvant-「力のある」（N. sg. m. sahā́vān ←→ sáhāvān），yúvan- / yúvant-「若い」，varimán- / varimánt- (m.)「幅」でも起こるので，これらは -van-, -man- 語幹変化から -vant-, -mant- 語幹変化への移行過程にあることを表していると考えられる[5]．ほかにも，たとえば árvan- / árvant-「馬」は古典サンスクリット語でも単数主格 arvā (: arvan-)，単数対格 arvantam (: arvant-) のように補充されている[6].

4　他言語との比較

サンスクリット語（rā́jan-「王」），ギリシア語（ákmōn「鉄床」，cf. Skt. áśman-「石」），ラテン語（homō「人間」）の -n- 語幹名詞を比較し，単数のいくつかの格で印欧祖語での変化を再建すると表 1 のようになる[7]．ただし単数主格の *-ōn は，延長 o 階梯（vr̥ddhi［の一部］に相当）に由来する

---

[3] Lanman, ‘Statistical’, 516.

[4] Bartholomae, „*nt*-“, 540; *AiG* §144.a.γ (S. 264–265).

[5] Macdonell, *Vedic Grammar*, §315 (p. 193), §330 (p. 211).

[6] 辻『文法』p. 46.

[7] Beekes, *Introduction*², 194.

表 1　n 語幹名詞の比較

		PIE	Skt.「王」	Gr.「鉄床」	Lat.「人間」
sg.	N.	*-ōn	rā́jā	ákmōn	homō
	...	...	...	...	...
	G.	*-n-és	rā́jñas	ákmonos	hominis
	V.	*-on	rā́jan	ákmon	homō

のか[8]，それとも Szemerényi の法則により **-ons > *-ōn となったのか[9] には議論がある．

単数属格ではそれぞれの言語で n が保存されている一方，単数主格ではサンスクリット語とラテン語で n が消失している．ほかの格形からの類推（analogy）によりいったん消失した n を復元することは容易であると考えられるから，これは *-ōn > *-ō という変化が起こった後，これら三つの言語の中ではギリシア語のみにおいて，ほかの格形からの類推で *-ō >> -ōn となり，n が復元された形が一般化したと考えられる．

5　語末の *n の消失

Schindler は，一般にあらゆる長母音に続く語末の *n は消失する（*-V̄n > *-V̄）とし，Mayrhofer もそれに従っている．しかし *-ēn の場合には *n の消失が起こらないことから *-ōn の場合に限る，と Harðarson や Jasanoff によって反論を受けており，Jasanoff は「アクセントのない *ō に続く語末の *n は消失する」としている[10]．

---

8 Beekes, *Introduction*², 186.

9 Fortson, *Introduction*², 70, 116.

10 Schindler, „Ausgleich“, 5; Mayrhofer, *Grammatik*, 159; Harðarson, „ ‚Frau‘ “, 119–121; Jasanoff, ‘*bé*’, 138, ‘*n*-stems’, 34–35.

6　ほかの語幹における語末音の消失

6.1　pitr̥-「父」

-(t)r̥- 語幹（PIE *-tér/tr-）の pitr̥-「父」の単数主格は PIE *ph₂tḗr > Skt. pitā́ のように語末の r が消失する一方，Gr. patḗr, Lat. pater では消失していない.

6.2　sakhi-「仲間」

-i- 語幹（PIE *-oi̯/i-）の sakhi-「仲間」（cf. sac- (: *sekʷ-)「ついて行く」，Lat. socius「仲間」，英 social）は，単数主格で PIE *sókʷ-h₂-ōi̯ > Skt. sákhā のように語末の i̯ が消失する[11]. ギリシア語でも *bʰéi̯dʰ-h₂-ōi̯ > peithṓ「説得」のように消失している. peithṓ のアクセントは類推によるもので, sákhā の方が古いアクセントを保存している[12].

凡例

(: A)	A は語根.
***B**	B は想定形.
****C > *B**	C は B を復元したもの.
D > E	D は E に変化.
F >> G	類推により F は G に変化.
***h$_x$**	印欧祖語の喉音（x = 1, 2, 3）.
***i̯**	印欧祖語の子音化した *i（サンスクリット語の y に対応）.
***kʷ**	印欧祖語の無声無気両唇口蓋音.
AiG	Wackernagel und Debrunner, *Altindische Grammatik*.
Gr.	Greek（ギリシア語）.

---

[11] 再建形 *sekʷ- については *LIV* s.v. 1. sekᵘ̯- (S. 525–526) を，*sókʷ-h₂-oi̯- については *NIL* s.v. *bʰei̯dʰ- (S. 12–13) を見よ.

[12] 本ノートは 2014 年 6 月 24 日の梶原三恵子先生の「印度語学印度文学演習 (1)」（東京大学文学部）での発表資料をほぼそのまま掲載したものである.

Lat. Latin（ラテン語）.

LIV Rix (Hg.), *Lexikon der indogermanischen Verben*².

NIL Wodtko et al (Hgg.), *Nomina im indogermanischen Lexikon*.

PIE Proto-Indo-European（印欧祖語）.

Skt. Sanskrit（サンスクリット語）.

V Vowel（母音）.

参考文献

Bartholomae, C., „Der arische Flexion der Adjektiva und Partizipia auf *nt*-“, *Zeitschrift für vergleichende Sprachwissenschaft*, 29 (1888), 487–586.

Beekes, R. S. P., *Comparative Indo-European Linguistics: An Introduction*² (Amsterdam: John Benjamins, 2011).

Fortson, B. W., IV, *Indo-European Language and Culture: An Introduction*² (Chichester: Wiley-Blackwell, 2010).

Harðarson, J. A., „Das uridg. Wort für ‚Frau‘ “, *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft*, 48 (1987), 115–137.

Jasanoff, J. H., ‘Old Irish *bé* “woman” ’, *Ériu*, 40 (1989), 135–141.

——— ‘The Nom. Sg. of Germanic *n*-stems’, in, A. R. Wedel and H.-J. Busch (eds), *Verba et Litterae: Explorations in Germanic Languages and German Literature. Essays in Honor of Albert L. Lloyd* (Newark, Del.: Linguatext, 2002), 31–46.

Lanman, C. R., ‘A Statistical Account of Noun-Inflection in the Veda’, *Journal of the American Oriental Society*, 10 (1880), 325–601.

Macdonell, A. A., *Vedic Grammar* (Strassburg: Trübner, 1910).

Mayrhofer, M., *Indogermanische Grammatik*, I-2: *Lautlehre* (Heidelberg: Winter, 1986).

Rix, H. (Hg.), *Lexikon der indogermanischen Verben*² (Wiesbaden: Reichert, 2001).

Schindler, J., „Fragen zum paradigmatischen Ausgleich“, *Die Sprache*, 20 (1974), 1–9.

Wackernagel, J. und Debrunner, A., *Altindische Grammatik*, III: *Nominalflexion,*

Zahlwort, Pronomen (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1929–30).

Wodtko, D. S., Irslinger, B., und Schneider, C. (Hgg.), *Nomina im indogermanischen Lexikon* (Heidelberg: Winter, 2008).

辻直四郎『サンスクリット文法』（岩波全書，1974）.